

二〇一七（平成二九）年度 夏期ワンデートレーニング 8月20日

国語

以下の手順で学習を進めて下さい。

- 一、現代文（評論一題）、漢文一題の二題で構成されています。授業までに自分で解答を完成させておいて下さい。
- 二、解答時間は気にせず、熟読熟慮し、全ての設問に解答して下さい。
- 三、一通り解答した後で、わからない語句は辞書を引いて調べて下さい。書けない字はその場で練習して書けるようにし、生きた文章の中で語彙力を強化して下さい。
- 四、現代文は一度解き終わったら、徐々に一目で捉える範囲を広げ、読む速度を上げる練習をして下さい。
- 五、漢文は最低二〇回、本文を「音読」して下さい。
- 六、漢文の文法書を常に手元に置き、本文に出てきた（設問で問われた）文法事項（句形・読み）が何であったかを確認して下さい。
- 七、これらの詳しいやり方は授業時にも丁寧に説明します。

担当講師 大塩竜也

一、次の文章は、岡本かの子の小説「家霊」の一節である。これを読んで後の問いに答えよ。

東京山の手にある「いのち」という店名のどじょう料理屋の一人娘であるくめ子は、家の商売を継ぐのを嫌って家出して就職したが、母親が病気になるたのを機会に家に戻り、現在は母親と同じように帳場に座っている。そこへ每晚、徳永老人がどじょう汁を注文しにやって来る。徳永老人は彫金職人であるが、代金が払えないために店に借金をこしらえていた。

ある夜も、風の吹く晩であった。夜番の拍子木が過ぎ、店の者は表戸を鉦して湯に出かけた。そのあとを見済ましでもしたかのように、老人は、そつと潜り戸を開けて入って来た。

老人は娘のいる窓に向つて坐つた。広い座敷で窓一つに向つた老人の上にもしばらく、手持無沙汰な深夜の時間が流れる。老人は今夜は決意に充ちた、しおしおとした表情になった。

「若いうちから、このどじょうというものはわしの虫が好くのだった。この身体のしんを使う仕事には始終、補いのつく食いものを撰らねば業が続かん。そのほかに、うらぶれて、この裏長屋に住み付いてから二十年あまり、(一)鰯夫暮しのどんな佗しいときでも、苦しいときでも、柳の葉に尾鱗の生えたようなあの小魚は、妙にわしに食いもの以上の馴染になつてしまった」

老人は搔き口説くようにいろいろのことを前後なく喋り出した。

人に嫉まれ、蔑まれて、心が魔王のように猛り立つときでも、あの小魚を口に①フクんで、前歯でぽきりぽきりと、頭から骨ごとに少しづつ噛み潰して行くと、恨みはそこへ移つて、どこともなくやさしい涙が湧いて来ることも言った。

「食われる小魚も可哀そうになれば、食うわしも可哀そうだ。誰も彼もいじらしい。ただ、それだけだ。女房はたいて欲しくない。だが、いたいけなものは欲しい。いたいけなものが欲しいときもあの小魚の姿を見ると、どうやら切ない心も止まる」

老人は遂に懐からタオルのハンケチを取出して鼻を擤った。「娘のあなたを前にしてこんなことを言うのは宛てつけがましくはあるが」と前置きして「こちらのおかみさんは物の判った方でした。以前にもわしが勘定の②滞りに気を詰らせ、おずおず夜、遅く、このようにして度び度び言い訳に來ました。すると、おかみさんは、ちようどあなたのいられるその帳場に大儀そうに頼杖ついていられたが、少し窓の方へ顔を覗かせて言われました。徳永さん、どじようが欲しかったら、いくらでもあげますよ。決して心配なさるな。その代り、おまえさんが、一心うち込んでこれぞと思つた品が出来たら勘定の代りなり、またわたしから代金を取るなりしてわたしにお呉れ。それでいいのだよ。ほんとにそれでいいのだよと、繰返して言つて下さつた」老人はまた鼻を擤つた。

「おかみさんはそのときまだ若かつた。早く婿取りされて、ちようど、あなたぐらいな年頃だつた。気の毒に、その婿は放蕩者で家を外に四谷、赤坂と浮名を流して廻つた。おかみさんは、それをじつと堪え、その帳場から一足も動きなさらなかつた。たまには、人に纏りつきたい切ない限りの様子も窓越しに見えました。そりやそうでしょう。

^A人間は生身ですから、そうむざむざ冷たい石になることも難かしい」

徳永もその時分は若かつた。若いおかみさんが、生埋めになつて行くのを見兼ねた。正直のところ、窓の外へ強引に連れ出そうかと思つたことも一度ならずあつた。それと反対に、こんな半木乃伊のような女に引つかかつて、自分の身をどうするのだ。そう思つて逃げ出しかけたことも度々あつた。だが、おかみさんの顔をつくづく見るとどちらの力も失せた。おかみさんの顔は言つていた——自分がもし過ちでも仕出かしたら、報いても報いても取返しのない悔いがこの家から永遠に課されるだろう、もしまた、世の中に誰一人、自分に慰め手が無くなつたら自分はすぐ灰のように崩れ倒れるであろう——

「せめて、いのちの息吹きを、回春の力を、わしはわしの芸によつて、この窓から、だんだん化石して行くおかみさんに差入りたいと思つた。わしはわしの身のしんを揺り動かして鑿と槌を打ち込んだ。それには、⁽³⁾片切彫にしくものはない」

おかみさんを慰めたさもあつて骨折るうちに知らず知らず徳永は明治の名匠加納夏雄以来の伎倆を鍛えたと言つ

た。

だが、いのちが刻み出たほどの作は、そう数多く出来るものではない。徳永は百に一つをおかみさんに献じて、これに次ぐ七八を売って生活の資にした。あとの残りは気に入らないといつて彫りかけの材料をみな鑄直した。「おかみさんは、わしが差上げた(3)簪(かんざし)を頭に挿したり、抜いて眺めたりされた。そのときは生々しく見えた」だが徳永は永遠に隠れた名工である。Bそれは仕方がないとしても、歳月は酷いものである。

「はじめは(4)高島田にも挿せるような大平打の銀簪にやなぎ桜と彫ったものが、(5)丸髻用の玉かんざしのまわりに夏菊、ほととぎすを彫るようになり、細づくりの耳搔きかんざしに糸萩、女郎花を毛彫りで彫るようになっては、もうたいして彫る(6)せきもなく、一番しまいに彫って差上げたのは二三年まえの古風な一本足のかんざしの頸に友呼ぶ千鳥一羽のものだった。もう全く彫るせきは無い」

こう言つて徳永は全くくたたりとなつた。そして「実を申すと、勘定をお払いする目当てはわしにもうありませんです。身体も弱りました。仕事の張気も失せました。永いこともないおかみさんは簪はもう要らんでしようし。ただただ永年夜食として食べ慣れたどぜう汁と飯一碗、わしはこれを摂らんと冬のひと夜を凌ぎ兼ねます。朝までに身体が凍え痺れる。わしら彫金師は、一たがね(7)期です。明日のことは考えんです。あなたが、おかみさんの娘ですなら、今夜も、あの細い小魚を五六ぴき恵んで頂きたい。死ぬにしてもこんな霜枯れた夜は嫌です。今夜、一夜は、あの小魚のいのちをぼちりぼちりわしの骨の髄に噛み込んで生き伸びたい——」

徳永が(8)タンガンする様子は、落日に対して拝するように心もち顔を天井に向け、猛犬のように(9)蹲り、哀訴の声を呪文のように唱えた。

くめ子は、われとしもなく帳場を立上つた。妙なものに酔わされた気持でふらりふらり料理場に向つた。料理人は引上げて誰もいなかった。生洲に落ちる水の(10)滴りだけが聴える。

くめ子は、一つだけ捻つてある電燈の下を見廻すと、大鉢に蓋がしてある。蓋を取ると明日の仕込みにどじょうは生酒に漬けてある。まだ、よろりよろり液体の表面へ頭を突き上げているのもある。C日頃は見るも嫌だと思つたこ

の小魚が今は親しみやすいものに見える。くめ子は、小麦色の腕を捲くつて、一ぴき二ひきと、柄鍋の中へ移す。握った指の中で小魚はたまさか蠢めく。すると、その顫動が電波のように心に伝わつて、那に不思議な意味が仄かに囁かれる——Dいのちの呼心。

くめ子は柄鍋に出汁と味噌汁とを注いで、ささがし牛蒡を掴み入れる。瓦斯こんろで掻き立てた。くめ子は小魚が白い腹を浮かして熱く出来上った汁を朱塗の大椀に盛った。山椒、一つまみ蓋の把手に乗せて、飯櫃と一緒に窓から差し出した。

「御飯はいくらか冷たいかも知れないわよ」

老人は見栄も外聞もない悦び方で、(7)コールテンの足袋の裏を弾ね上げて受取り、仕出しの(8)岡持を借りて大事に中へ入れると、潜り戸を開けて盗人のように姿を消した。

不治の癩だと(9)センコクされてから却つて長い病床の母親は急に機嫌よくなった。やつと自儘に出来る身体になれたと言つた。早春の日向に床をひかせて起上り、食べ度いと思うものをあれやこれや食べながら、くめ子に向つて生涯に珍らしく親身な調子で言つた。

「妙だね、この家は、おかみさんになるものは代々亭主に放蕩されるんだがね。あたしのお母さんも、それからお祖母さんもさ。恥かきつちやないよ。だが、そこをじつと辛抱してお帳場に嚙りついていけると、どうにか暖簾もかけ続けて行けるし、それとまた妙なもので、誰か、いのちを籠めて慰めて呉れるものが出来るんだね。お母さんにもそれがあつたし、お祖母さんにもそれがあつた。だから、おまえにも言つとくよ。おまえにも若しそんなことがあつても決して落胆おしでないよ。今から言つとくが——」

母親は、死ぬ間際に顔が汚ないと言つて、お白粉などで薄く舐き、戸棚の中から(10)琴柱の箱を持って来させて「これだけがほんとに私が貰つたものだよ」

そして箱を頬に宛てがい、さも懐かしそうに二つ三つ揺る。中で徳永の命をこめて彫つたという沢山の金銀簪の

音がする。その音を聞いて母親は「ほ　ほ　ほ」とふくみ笑いの声を立てた。それは無垢に近い娘の声であった。

(『岡本かの子全集5』ちくま文庫による。本文中の表記を一部あらためた箇所がある。)

〔注〕 (1) 鰥夫……妻を失った夫。

(2) 片切彫……彫金技術のひとつ。絵模様をあらわす線の片側を垂直に彫り、他の片側を斜めに彫ったもの。

(3) 簪……女性が頭髪に挿す装飾品。

(4) 高島田……女性の髪の毛の結び方のひとつ。明治以後は若い女性に好まれ花嫁の正装となった。

(5) 丸髻……結婚した女性の髪の毛の結び方のひとつ。

(6) せき……ゆとり。余地。

(7) コールテン……ビロードに似た木綿の畝織物の一種。洋服地・足袋地などに用いる。

(8) 岡持……平たくて、ふた・手のついた桶。食物を入れて持ち運ぶのに用いる。

(9) 琴柱……箏や和琴の胴の上に各弦を一個ずつ立てて弦を支え、音の高低を調節するのに用いる「人」の

字形の具。

問一 二重傍線部①～⑤の片仮名を漢字に改め、漢字の読み方を平仮名で示せ。

問二 傍線部A「人間は生身ですから、そうむざむざ冷たい石になることも難かしい」とは具体的に誰のどのような状態をさしているか、本文に即して説明せよ。字数は解答用紙を目安とする(以下の設問も同様)。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問六

次の①～⑤の中から、本文の内容や表現の特徴について述べた文として適切なものを二つ選んで番号で記せ。

- ① 徳永老人の語りの部分と地の文が一体化して、会話の部分が地の文と区別がつかないように書かれていることで、老人の語りに強い迫力が生じている。
- ② 徳永老人の語りを通して片切彫の技法が生き生きと描写されることで、老人が簪を作る名人へと次第に到達していく過程が鮮やかに浮かび上がっている。
- ③ 徳永老人 とおかみさんが登場する場面が分けられることで、相手に思慕の念を抱いていただけではなく、それぞれにとつての「いのち」が重要であることが示されている。
- ④ 徳永老人の昔語りを聞き、若い頃の母親と老人が互いに好き合っていたことを知ったくめ子が、二人の恋の思い出に心を動かされて老人にどじょう汗を恵んでやるまでの心の動きが描かれている。
- ⑤ 徳永老人の語りを通して、おかみさん、くめ子のそれぞれの心情が描写されることで、何代にもわたる運命的な「いのち」の連鎖が浮かび上がってくる。

問七

次の①～⑤の作家の代表的作品をア～クの中からそれぞれ一つ選んで記号で答えよ。

- ① 夏目漱石
 - ② 森鷗外
 - ③ 川端康成
 - ④ 太宰治
 - ⑤ 大江健三郎
- ア 千羽鶴
イ 富嶽百景
ウ 道草
エ 飼育
オ 阿部一族
カ 山月記
キ 潮騒
ク 夜明け前

二、次の文を読んで、後の問に答えよ。(送り仮名を省いた箇所がある。)

大高坂清介、著『適從録』一以駁仁齋。弟子持来示之曰、「先生作之弁^レ。」仁齋笑而不^レ言。弟子曰、「人著^レ書以恣^ニ議^レ己。苟^ニ辞不^レ塞[、]豈可^ニ黙而止^一乎。先生而不^レ答、則請余代^レ拆^レ之。」仁齋曰、「君子無^レ所^レ争。如彼果是[、]我果非、彼於^レ我為^ニ益友^一。如果我是[、]彼果非、他日彼其学長進、則当^ニ自知^レ之。小子宜^シ深戒^一。」

(『先哲叢談』より)

(注) 大高坂清介——江戸時代、土佐出身の漢学者。

仁齋——伊藤仁齋。大高坂清介と同時代の、京都の漢学者。古義学を提唱する。

君子無所争——『論語』の一文。

問一 傍線 a 「苟」と傍線 b 「如」の読み方としてそれぞれ適切なものを次の中から一つずつ選び出せ。

- ① ごとし ② かりに ③ もし ④ すなわち
⑤ いやしくも ⑥ けだし ⑦ まさに

問二 傍線 A 「豈可黙而止乎」を文意が正しくわかるように口語訳せよ。

問三 傍線B「則請余代拆之」の「之」は何を指しているか。適切なものを次の中から一つ選び出せ。

- ① 適従録 ② 弟子 ③ 先生 ④ 論語

問四 傍線C「小子宜深戒」の読みをすべてひらがなで記せ。

問五 この文の趣旨として適切なものを、次の中から一つ選び出せ。

- ① 学問は、常に自分の立場を明確にしておかなければならない。
② 学問は、常に事の正邪を明らかにし、的確でなければならない。
③ 学問は、意見の対立を超えて他者と交流することが大切である。
④ 学問は、他者と争うのではなく、自己を深めることが大切である。